

お言葉どおり、この身に成りますように

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24784

「お言葉どおり、この身に成りますように」

大学宗教主任 出村 みや子

ルカによる福音書、第一章二六～三八節

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 だ
ビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。その
おとめの名はマリアといった。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵ま
れた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いつたいこの挨拶は
何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなた
は神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付
けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父
ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」
34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますでしょうか。わたしは男の
人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなた
を包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、

年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われているのに、もう六か月になつてゐる。³⁷ 神にできないことは何一つない。」³⁸ マリアは言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去つて行つた。

教会の暦である教会暦ではイエス・キリストの降誕を待ち望む待降節（アドヴェント）に入り、夜の街ではクリスマス・イルミネーションが見る人の目を楽しませてくれる季節となりました。日本語で待降節と訳されるアドヴェント（advent）は、ラテン語で到来を意味する *advenio* という動詞に由来する言葉で、教会ではクリスマスまでの期間をアドヴェントキャンドルに毎週一本ずつロウソクを灯しつつ、イエス・キリストが人類のもとに到来した意味を思い起こしながら静かに過ごします。キリスト教国ではない日本の多くの人にとつても例年ならば待ち遠しいクリスマスですが、³⁹ の大震災で多くの方々が犠牲になり、故郷や住む家を失つていまだ不自由な生活が続いている方々が身近にいることを思う時、クリスマスを前に悲しみや戸惑いを覚える学生も少なくないのではないのでしょうか。キリスト教主義大学で学ぶ学生の皆さんには、今年は特に神の子イエス・キリストがこの世に到来したクリスマスの意味を静かに問うていただきたいと思います。

本日お読みした聖書の箇所は、受難・復活の記事と並んでキリスト教の歴史の中で神学的にも文化史的にも大変重要な箇所の一つです。この記事は、突然に救い主を身ごもるという出来事に直面して、戸惑い、考え込みながらも、最終的にはそれを神のご計画として喜びをもって受け入れようとする一人の若き女性マリアの心の葛藤のプロセスを見事に描いています。二八節をご覧下さい。天使ガブリエルはマリアに「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」と告げたとあります。しかしマリアは当然のことながら、あまりに突然の出来事に当惑したことが示されています。二九節には「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」と記されています。マリアは天使の告知を受けた際に、なぜ自分が天使の祝福を受けるのか当惑し、考え込んでしまわざるを得ないような場面に直面したのです。

おとめのマリアに天使のガブリエルが人類の救い主となるべき男の子の誕生を告げるこの場面は「受胎告知」として知られ、レオナルド・ダ・ヴィンチやフラ・アンジェリコを始めとして多くの宗教画家が手掛けています。喜びのメッセージを伝える天使のガブリエルに対して、両手を胸の前で組んで従順に受け入れる姿勢をとるマリアを描いた「受胎告知」の美しい絵を、これまで皆さんも目にすることがあると思います。しかしこのモチーフを扱った絵画にはもちろん、当惑し、考え込んでいるマリアの姿は描かれていません。

次に三〇節以下に記された天使の告知を見てみましょう。天使は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもつて男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家をおさめ、その支配は終わることがない」と高らかに告げるのです。天使の告知の言葉には、救い主となるイエスの誕生がはつきりと告げられ、ここでは当時の人々がメシアの誕生をダビデの家系と結び付けていたことが示されています。東北学院大学のクリスマス礼拝では毎年ヘンデルの『メサイア』が高らかに歌われますが、まさに救い主メシアの誕生は人類に対してなされた神の大きい恵みの業なのです。

しかしマリアは天使のこの告知に対しても、「どうして、そのようなことがありえますでしょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と当惑し、天使の言葉に反問しているのです。マリアには通常の出産とはまったく異なる出来事が告知されました。とりわけ名もなき一人の女性である自分に神が目を留め、救い主の母となることなど、マリアには想像を絶する出来事であったのでしよう。それに対して天使は三度目に、マリアが聖霊によって身ごもつたこと、「神にできないことは何一つないこと」、そしてその証拠としてマリアの親類のエリサベトも不妊の女性のまま高齢になつてしまつたにもかかわらず、神の力によって今男の子を身ごもっていると告げたのです。洗礼者ヨ

ハネの誕生です。ルカ福音書では、マリアは最終的に「神にできないことは何一つない」との天使の言葉を従順に受け入れます。そして三八節に伝えられているように、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と言つて天使の告知を素直に受け入れているのです。

こうしてマリアが天使の告知を従順に受け入れるこの最後の場面が、有名な「受胎告知」の絵画に表現されているのですが、その際に着目していただきたいのが、宗教画家たちがその場面に一様に、マリアの前に開かれた聖書を描いていることです。画家たちは、マリアの前にちょうど旧約聖書のイザヤ書七章一四節が広げてあり、マリアは天使の告知を聞いた時に、預言者イザヤの預言の言葉、「見よ、おとめが身ごもつて男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる」との言葉が自らの身に成就したことを悟つたのだと理解しました。なぜならこのことはマタイ福音書に収録された「受胎告知」の記事にはつきりと書かれているからです。

ここでマタイによる福音書の一章一八節以下に記された天使による受胎告知の場面を見てみましょう。ここでは天使はマリアの婚約者のヨセフに対して、夢で聖霊による救い主イエスの誕生を告げていますが、二二節で「このすべてのことが起こつたのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と言われ、続いて先ほどの預言者イザヤの「見よ、おとめが

身ごもって男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる」の箇所が引用されているのです。そのためにマリアの「お言葉どおり、この身に成りますように」との言葉は、「聖書に書かれた言葉の通りに」と理解されるようになり、マリアは聖書の言葉を素直に受け入れる信仰者のモデルとみなされるようになりました。そしてその後の教会の歴史の中で、何ら明るい未来の到来を信じる事ができない状況の中に置かれた多くの人々は、不安や苦難の中で神の言葉に希望を託し、神にのみ信頼することをマリアに学んできたのです。

クリスマスは神の子イエス・キリストの地上への到来を喜び祝う時ですが、今年は2011年の大震災以来それまでの暮らしが一変し、不安や悲しみの中でクリスマスを迎える人々が私たちの身近にも多くおられます。東北地方に住むわたしたち一人一人が今年は何度日常の劇的变化に戸惑い、考え込まざるをえない状況に遭遇したでしょうか。わたしは今日選んだ聖書の箇所を読みながら、報道で伝えられた、震災時に出産したある女性の勇気を思い、また被災地で母となる多くの女性たちのことを思いました。皆マリアのように多くの不安と困難の中で命をはぐくみ、たくましく母となっていく女性たちです。わたしたちは自らが置かれた状況をしっかりと見つめながら、クリスマスを迎えるこの準備の時であるアドヴェントの期間、クリスマスの意味について静かに問うていきたいと思えます。